

明善寺：庫裡

明善寺の本堂に隣接する合掌造りの大きな農家家屋は、住職とその家族が住む「庫裡」だった。1817年に建てられた、いま博物館になっている5階建てのこの家は、荻町の集落の中でも有数の建築物であり、地域における住職の地位を反映している。木造に比べて耐火性の高い土壁を使った数少ない家の一つであり、地元の職人ではなく、当時の役所があった高山から来た大工によって建てられた。

建物の330平方メートルの1階部分には、囲炉裏を中心とした広い居間や、主に客を迎えるための畳の部屋、仏壇、家族の寝室などの生活空間がある。この配置は、白川郷の合掌造り家屋によく見られるもので、多層構造の屋根裏部屋は、20世紀初頭までこの地域の主要産業であった養蚕のために主に使われていた。僧侶とその家族は、寺に関する義務を果たす傍ら、養蚕を行っていた。

庫裡は本堂と室内の回廊で結ばれている。この回廊の窓からは、特徴的である寺の庭が見える。白川郷では、庄川流域の厳しい気候の中で維持するのが難しく、コストもかかるため、装飾的な庭はほとんど見られない。